生き方・いろいろ・ゆたかな人生

男女平等推進 from むさしの

まなこ

101
DEC. 2017

特集 どうなってるの？ 男性のワーク・ライフ・バランス

「課題は男性の働き方です」……P. 2
男性のワーク・ライフ・バランス in むさしの ……P. 4
男女共同参画フォーラム2017小島慶子さん講演より ……P. 6

企画 発行 武蔵野市 市民部 市民活動推進課 男女平等推進センター

特集

どうなってるの？男性のワーク・ライフ・バランス

女性の活躍推進や長時間労働の是正が話題になる昨今、特に男性の働き方が重要視されています。仕事や家庭で活躍し、生き生きと暮らせる「自分らしい働き方」を見つけるヒントを探ります。

「課題は男性の働き方です」

ワーク・ライフ・バランス（以下WLB）の研究者で、自身もそれを実践されている瀬地山 角さんに伺いました。

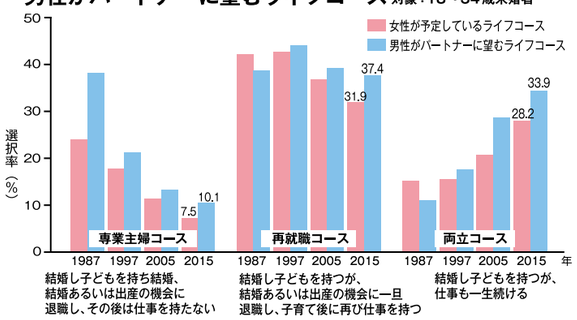
瀬地山（せちやま） 角（かく）さん
東京大学大学院総合文化研究科教授。専門はジェンダー論。著書に『お笑いジェンダー論』『東アジアの家父長制』（いずれも勁草書房）など

女性の就業継続はジャンボ宝くじ当選と同じ効果

高度成長期以降、日本では一家の稼ぎ手である父親と専業主婦の母親という特定のタイプの家族が当たり前とされてきました。しかし、*国の調査によると、未婚の女性で「専業主婦になる予定」と思っている人は7.5％、「なってほしい」と思う男性は10.1％となっており、男性も一人の働きでは家族が食べていけないことに気がついています。ところが、家事・育児には男女に大きな不均衡があり、今のままでは女性に働けと言っても無理なので、現在、出産後も継続して働くのは25％～30％。家事・育児などで女性は時間が足りないので退職者が増える。正規の就業が難しく、非正規で働くことが多いので再就職しても女性の賃金は下がり、生涯賃金は極端に少なくなります。30代で年収500万円の人は、30歳以降、ボーナス・退職金を含め約2億円稼ぎます。仮に、年収350万円でも1億円以上稼ぐことになり、女性が継続的に働けば家計にとってジャンボ宝くじが当たるのと同じ効果があるのです。男性は、残業をするより家事をやった方がよっぽどよいわけです。

また、女性が働けば家計の負担がそれだけ軽くなり、男性一人が大黒柱になる必要もなくなります。わが国の自殺の割合は、7対3と男性が圧倒的に多く、特に中高年層が多いのが特徴です。妻が正社員として働くことができれば、男性は一人で家計を支えるというプレッシャーから解放され、男性の自殺は減るのではないでしょうか。人生や家計のリスク管理を考えたとき、二つの電源を持つことは不可欠です。何より、女性が正社員をあきらめるのはリスクが高すぎます。女性の経済力は高まりましたが、中断再就職は、生涯賃金などのさまざまな条件が悪くなることも知っておいてください。さらに調査では、女性が結婚相手に求める条件として「家事・育児の能力」や「自分の仕事への理解」が経済力を上回っています。時代は変わり、学歴や経済力より家事・育児能力が求められていることに男性は気づいていないのです。

■女性が予定しているライフコースと男性がパートナーに望むライフコース 対象：18～34歳未婚者



（図表出典）国立社会保障・人口問題研究所「第15回出生動向基本調査（独身者調査）」（平成27年）より抜粋
注：本図表は「DINKS」「非婚就業コース」の選択肢を含むパーセンテージを表す

政府の「働き方改革」とWLB実現のメリット

最近話題となっている政府主導の「働き方改革」は、WLBの追い風になり悪くはないと思います。企業にとっても決して損ではありません。利用すればよいのであって、既に大企業では残業圧縮などを実行して成果を上げています。WLBを実現すると、残業は減り生産性は上がるというメリットもあります。日本の生産性が低いのは、基本的には余計な仕事が多いからであり、身近な例が社内文書です。見栄えにこだわりすぎて作成に時間がかかるなど、あれこれ余計な作業が多すぎるのです。小さなことに時間を費やし、無駄な労力をかけ過ぎることで生産性を落としてはいけません。これは管理する側である上司の問題でもあります。

社会の再生産については、植林をたとえとして考えてみましょう。植林をする林業者は、植林をしない林業者にコスト競争で勝てませんが、長い目で見ると林業を再生産して環境に優しい成果を社会に提供できます。同様に、社会の再生産のための家事・育児というコストは女性の肩にのみ重くのしかかっていますが、これを社会全体で負担しなければ社会は機能しなくなってしまいます。

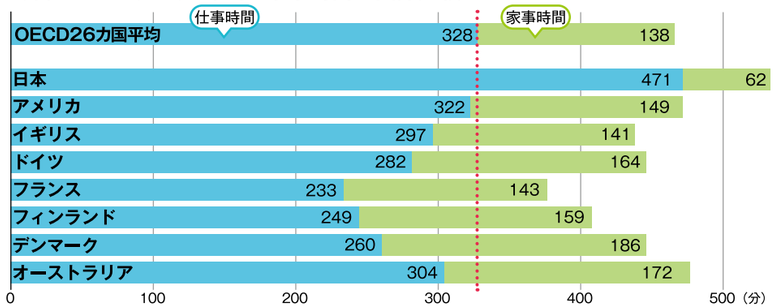
個人の努力でWLB実現を

私は、結婚前に相手を決めるより先に保育園を決めていました。東大のキャンパス内にある地域の人も利用している認証保育所です。ここに子どもを預けて働こうと思い、住居も家賃が割高でしたが満員電車に乗らずに通勤できるところを選びました。子どもの送り迎えは100％近くやりましたし、裁量労働の職業でしたので夕食も私がだいたい作りました。WLBを実現する中で自分の研究時間は減りアウトプットも減りましたが、これは覚悟の上のことでした。子どもを持っての家事・育児は私の仕事であり、自らそれを実践せずにこの分野の研究をすすめるわけにはいきません。仕事のペースはかなり落ちましたが、子どもを持ったことは大きな幸せでした。その子どもも今は大きくなり、自分の時間も増えてきています。

WLBが普及しない理由は、必ずしも国の制度が遅れているためだけではなく、むしろ条件は整っています。男性の育休のように法律で認められているものは、労働者がきちんと主張すべきものです。帰宅時間について、上司がどうこう言うとか、周りが働いているから帰れないなどといった発想は理解できません。自分でできることはいくらでもあるはずです。

そして、WLBを実現するためには男女の仕事のシフトチェンジも必要です。致命的なのは、子育てで女性が会社を辞めてしまうことです。これは男性が家事・育児をやらないからなのです。男性は、思い切ってギアを入れ替えねばなりません。高度成長やバブルを経験した私と同年代の管理職は、育休などに判子を押すのを躊躇する層になっています。しかし、子どもを産み育てられない社会になってしまっている状態を、このままにしておいて良いのでしょうか。私たちは、植林コスト（家事・育児）をしっかりと払っていくべきです。

■男性の1日あたりの仕事・家事時間の国際比較



（資料出所）経済協力開発機構（OECD）「Balancing paid work,unpaid work and leisure」（2014年発表）より市作成
※原則として、15～64歳の一日の平均値。仕事時間には学校での時間、就職活動の時間、通勤・通学時間などを含む。家事時間には育児時間も含む。ただし、国によって調査方法や調査項目が異なる。

働き盛りの男性へのメッセージ

年代によってWLBへの思いは異なりますが、あえていえば、「毎日子育てにかかわることは楽しいですよ」、「夫婦で働けば、家族で旅行にいったりもできますよ」などでしょうか。そして、就活世代には「勤める（勤めたい）会社を十分チェックして」と伝えています。20代はがむしゃらに働いてもよいですが、30代の働き方がどうなっているかが要チェック。例えば、30代で夜中まで働く会社では子育てはできません。さらに、子どものいる女性管理職が何人いるかなどをチェックしてみるとよいでしょう。女性にとってのブラック企業は、男性にとってもブラック企業なのですから…。

［取材　矢後麻美／取材・文　大久保 力］

*国立社会保障・人口問題研究所「第15回出生動向基本調査（独身者調査）」（平成27年）より

インタビュー

男性のワーク・ライフ・バランスinむさしの

市内在住・在勤のさまざまな世代の働き盛りの男性たちに伺いました。

地域貢献活動を楽しみ、得たことは、自らに活かされる

阿部勇雅（ゆうが）さん（26歳）

西東京市在住
(株)武蔵境自動車教習所
営業企画課 勤務
家族：犬２匹

今は会社の地域活動以外にも週1回、第五小学校で小中学生にバスケットボールを教えています。五小とは、*おやじの会主催の防災合宿で行われたシートベルト横転体験の指導に行き、ご縁がありました。

仕事、会社の地域活動、バスケのコーチ、友人と会ったり、飼い犬たちと触れ合うプライベートの時間をうまく住み分けられているのは、所属部署がフレックスタイムを採用しているからでもあります。コアタイムが13時から16時なので、平日17時からのバスケも仕事上がりに行くことが可能です。

理想とするWLBを達成するのは難しいですが、現状には満足しています。上司から社内業務はもちろん、会社の地域貢献として開催しているサマーフェスティバルや餅つき大会以外も、思いついたアイデアをどんどん推進していこうと言われていて、外回り中に柔軟に情報収集し、実践しています。市外の「井の頭公園みたか商工まつり」参加もそのひとつです。

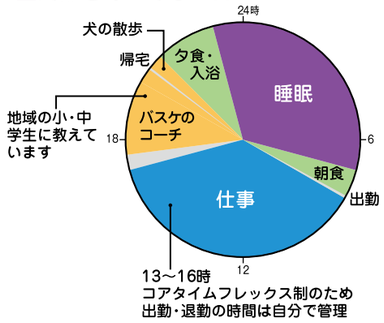
地域活動は年代を問わず、体験することをお勧めします。目的をもって参加した活動を成し終えた充実感は、何事にも代えがたいものです。

将来のパートナーは、転勤のない方を希望します。私自身、親の仕事の都合で転勤が多かったので、私には地元と呼べる場所がなく、幼なじみと呼べる友達がいません。自分の子どもには、そのような思いをさせたくありません。

縁あって住むことになった場所のことを知り、人と人のつながりを知ることに興味をもっていたので、大学時代から町おこしに参加し、地域貢献活動に熱心に取り組むようになったのだと思います。

［取材・文　島﨑理恵］

■阿部さんのある一日



*おやじの会　武蔵野市立第5小学校の父親を中心とする保護者有志とそのOB

人と人、人と地域をつなげる架け橋をつくりたい

中西信介さん（30歳）

緑町在住
認可保育所
「まちの保育園 吉祥寺」勤務
家族：妻（複業、東京と福島の二拠点居住）

大学卒業後、公務員として国の仕事に携わっていましたが、毎日夜遅くまで働きどおしでした。働くうちに、もう少し地域に根差した働き方で周りを幸せにする仕事をしたいと考えるようになりました。そんなとき、保育園という場を通して、人と人や地域をつなげるコミュニティコーディネーターという仕事に出会いました。

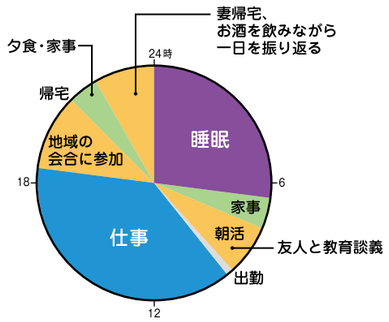
保育園では、事務や経理、用務全般、保育補助などをしつつ、子どもたちの興味を感じとりながら、地域の人、自然、文化などとつなげる仕事をしています。最近では「クリーンむさしのを推進する会」の協力を得て、生ごみから良い土を作って屋上で野菜を育てる食育体験や、高齢者施設への訪問・交流をしています。前職より終業が早くなったので、地域の様々な活動に参加・企画できるようになりました。地域と関わりが少なくなりがちな20～30代の仲間を集めて、地域で話題のスポットを訪ねる「寺子屋きっちん」の活動もそのひとつ。出社前に打ち合わせしたり、教育関係の仕事をする仲間と教育談義を交わす朝活をすることもあります。

妻は福島県で地域に根差した仕事をしているため、週の半分は家にいません。妻が帰宅した日は、お互い大好きな日本酒を飲みながら仕事の話で盛り上がります。

人によって、「ワーク」と「ライフ」の捉え方は様々だと思いますが、「ライフ」があってこその「ワーク」。「ワーク」と「ライフ」をきっちり区別するのではなく、「ライフ」に自然と「ワーク」が溶け込んでいることが理想だと感じています。これからも職場や家族といった縦・横のつながりだけでなく、普段の生活では接点を持ちづらい〝斜め〟の関係が育まれる環境を用意し、人と人をつなげ、地域に愛着をもち、楽しく地域に参加する人を増やしていきたいです。

［取材・文　神谷奈央子］

■中西さんのある一日



自分で時間の使い方を調整できる―それが私には大切です

田中勝章さん（43歳）

桜堤在住
(株)リクルートキャリア
企画部門 勤務
家族：妻（フルタイム勤務）
子ども２人（小学生）

子どもが通う小学校のPTA会長を、この4月から務めています。立派な動機があったわけではなく、選出会にはフルタイムで働く妻の代わりに行っただけです。ところが、難航する様子が見過ごせなくなり、手を挙げてしまいました。保護者の状況は多様化しています。PTAも、もっといろんな人が参加できるものにしたい。その変化の象徴になれれば、という思いでした。また、もともと、仕事で「働き方」の研究に携わるなどWLBへの関心もありましたし、学童の保護者会で役員を3年間務めた経験もありました。

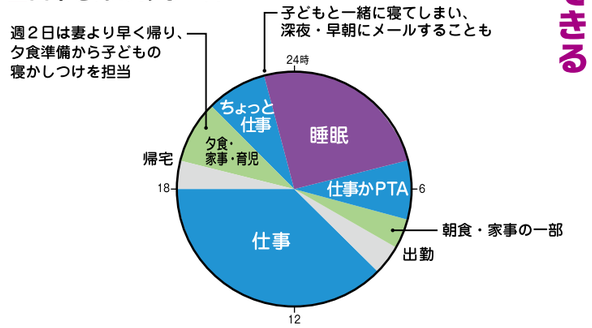
ただ、PTA会長の仕事量は想像以上でした。メールなどのやりとりが毎日のようにあります。さらに平日や週末の集まりも。会社は理解があり、仕事の裁量もあるほうですが、平日のPTAの仕事の多くを他の役員たちが代わりに担ってくれているのが実情です。

会社とPTA、それに家事・育児とで、「時間のやりくりができている」とは決して言えません。趣味の時間も十分とは言えません。ただ、もともと、周りからは「働くのが好き」と見られるタイプ。父親になってからは、趣味に集中するというより、子どもと遊びながら息抜きできるようにもなっていました。WLBというと、プライベートの時間をどれだけ増やすかと考えがちですが、私にとっては、仕事もそれ以外の時間も統合して、自分でコントロールすることができる、ということが重要です。

「人生100年」を見据え、仕事以外の多様なつながりを今からでも持つと、生き方が豊かになるとは思っています。ただ、WLBも含めて世間の「べき」にしばられず、自分たちにあう働き方や役割分担を見つければいい。そのために、まずは、フラットにパートナーと話し合うことが大切だと思います。

［取材・文　小西美穂子］

■田中さんのある一日



意識的に生活を変えて、地域でも自分の力を活かしています

菅野昭彦（かんの）さん（59歳）

桜堤在住
(株)ジェイアール東日本企画 勤務
家族：妻、子ども２人（大学生・高校生）

毎朝出勤前に犬の散歩をし、休日には家族分の食事を作っています。20時に帰宅するので、家族との団らんや地域活動の時間もとれます。会社では管理的な仕事をしていますが、昔は広告を作る現場にいて仕事とプライベートの境目もなく、六本木や銀座に繰り出し毎日午前様、という時代もありました。

でも、会社人生の上り坂を過ぎてから意識的に生活を変えました。一週間で使う小遣いを決めてその範囲で行動するように心がけたのです。今のWLBにはまあまあ満足しています。

地域の活動としては、息子たちが小学校から野球を始め、チームの父母会に関わったことが始まりでした。市の*ジャンボリーにも指導者として参加しています。私の住む地区は会社員の家庭が多く、地域のことに関わる父親が少ない傾向にありますが、地域デビューは子どもをきっかけにするのが一番のチャンス。妻もパートの仕事以外に地域の手伝いをしています。夫婦でなるべく一緒に行動するというのが今後の理想です。

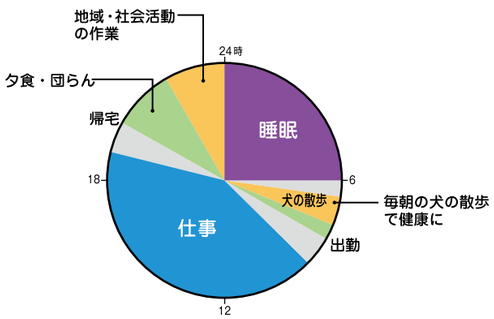
市報を見て男女平等推進審議会の市民委員にも応募しました。審議の内容は会社の仕事にも大きく関わるので、相互に役立っています。

「ワーク」では会社組織を通じて社会とつながっていますが、「ライフ」では個人が社会と直接つながるといえます。定年後に急に社会に向き合おうとしても遅いのです。私は自分に向いていること、やりたいことを自問自答するなかで、仕事で発揮できていることが社会でも活かせるとわかってきました。

30年後、日本の人口は1億人を割るといわれていますが、私たちは何を残せるでしょうか。女性は遠慮せずに経済力をつけ、男性も定年前から地域のことに関わっていけば、社会全体がもっとよくなっていくと思います。

［取材・文　藤田和香子］

■菅野さんのある一日



*ジャンボリー　むさしのジャンボリー。武蔵野市在住の小学4年生から6年生の希望者が、長野県川上村で2泊3日の自然体験を行う事業

男女平等とは、すべての人が「自分の人生を大切にしながら生きていけるようにしよう」ということだと思います

6月に開催された男女共同参画フォーラム2017「育てあうまち武蔵野～条例でかわるあなたの未来」で、タレントの小島慶子さんが自身の経験や日々の生活を通しての男女平等観について話されました。その一部を紹介します。

小島慶子さん

タレント・エッセイスト。1995年TBSに入社し、アナウンサーとしてテレビ、ラジオで活躍。99年第36回ギャラクシーDJパーソナリティー賞受賞。2010年に同社を退社後は、タレント・エッセイストとして幅広い分野で活動している。著書に『ホライズン』（文藝春秋社）、『なるらいらい～日豪往復出稼ぎ日記』（講談社）

今、私はオーストラリアのパースに住んでいて、月1回東京と往復しながら仕事をしています。オーストラリアに移住するきっかけとなったのは、共働きだった夫が「50歳を前にして、違う角度から人生をみてみたい」と言って仕事を辞めたことです。

私も小島慶子というひとりのタレントとして仕事をしたいと、15年間勤めた会社を辞めたので、さすがにダメとは言えず、「いいよ、応援するよ」と最初は言いました。でも、まさか自分の夫が仕事を辞めるとは。まったくの想定外でした。

すると、それまでもっていた男性に対する偏見が、私のなかで急に膨らみ始めたのです。「お金を稼がない男の人をどうやって尊敬すればいいの」「肩書をもってないって、ただの人じゃない」「私が食べさせてあげてるんじゃん」と。これまで、そういうことを言う男性を軽蔑し、「いなくなればいい」くらいに思っていた私が、まったく同じことを夫に言ったのです。

私は、「オトコは学校出たら働くもの。働き始めたら辞めない。オンナより稼ぐのは当たり前。出世したがるのも当たり前」というのが、あるべき男性の姿だと信じ込んでいたのです。私の父がそのように、企業戦士として生きたので、その影響が少なからずあったのかもしれませんが、男性をものすごく偏狭なイメージでしか見ていませんでした。

夫が無職になってから、「私が食べさせてあげている」というような恩着せがましい態度をとってしまっていたのですが、ある時夫が言いました。「君はずっと僕に怒ってるみたいだけれど、違う誰かに言いたかったことを僕にぶつけているような気がする」と。

はっ、としましたね。そして、アナウンサー時代、男性と全く同じ条件で採用されたにもかかわらず、「女子アナっていうのはな、差し出がましいことを言わず、オトコの横でニコニコ笑っていればいいんだよ」と言ったあの人、「かわいそうに子どもを保育園に預けて」と言ったあの人…いろいろな人の顔が浮かびました。と同時に「私、彼らに対する怒りを夫にぶつけてしまっていたんだ！」と気づきました。かわいそうに、夫は一度もそういうことを言ったことがないのに。そして、男女平等とは、弱い女性が、強い男性に対して求めるものだと思い込んでいたのですが、それだけではなく、女性にもいろいろな生き方があるように、男性にもいろいろな生き方があっていいということだと気づかされたのです。

今や共働き世帯が片働き世帯より多くなり、出産・育児や介護で仕事のペースを考えなくてはならなかったり、会社の倒産や病気になって働けなくなり、昨日までできていた暮らしができなくなることもあります。そういう意味では、私たちが抱えているリスクも男女平等なのです。その時に男性vs女性で対立したり、どっちが男性の仕事、どっちが女性の仕事と、論争するのは不毛です。そうではなく、これまで男性用に設計されてきた社会・モデルが、男性にとっても、女性にとっても使いづらい、息苦しいというなら、これまで当たり前とされてきたことを、一度見つめ直し、点検してみる。そして今の社会状況に合わせた当たり前のことができるように設計し直し、女性も男性も自分の人生を大切にしながら生きていけるようにしよう――こういうことが男女平等ということではないかと思うのです。

武蔵野市に条例が誕生しました。そこで男女平等がうたわれ、ジェンダーだけではなく、いろいろな違いをもった私たちが暮らしやすい社会のために何が必要なのかが込められていることは、とても素晴らしいと思います。

［文　矢後麻美］

平成29年度『まなこ』第2回サポーター会議

100号「武蔵野市男女平等の推進に関する条例ができました！」を読んで

- いろいろな人たちがひとつの場所にいる表紙がとても素敵。また、基本理念が具体的に書かれていて「なるほど」と思った。市民が深く関わってできた条例だという大切さが伝わった。
- 表紙に条例の内容があらわされていてわかりやすい。条例を知らなかったため、例示とともに内容も充実しており理解しやすかった。『まなこ』100号までのあゆみも、当時の時代背景や過去の表紙などを知ることができてよかった。
- 男女だけでなく、国際社会の取り組みや特に困難な状況にある人など、幅広く網羅されていてよかった。この条例を今後どのように浸透させていけばよいか、考えたい。
- 市報の特集号だけでは理解できなかったが、基本理念の例示がとてもわかりやすかった。今号から4色刷りになり、より手に取りやすくなったのではないか。これからの自分の役割を見つけていきたい。
- 難しいと思われがちな条例をかみ砕いた形で基本理念が示されており、わかりやすかった。市民としてさまざまなことに今後取り組んでいきたい。
- 読者に問いかけるような文体でわかりやすく、押し付けや取り締まりのような条例ではなく、市民のための条例であることが伝わった。性別という枠組みではなく〝個人〟としての意見が尊重されるべき、という視点を大切にしたい。

その他、今後取り上げてほしいテーマなどについて活発なご意見をいただきました。

7月19日（水）男女平等推進センター会議室にて

supporter's 200 words 『まなこ』サポーターの200字コラム

あなたが考える働き盛りの男性のワーク・ライフ・バランスとは？

ワーク・ライフ・バランスの理想と現実?!

富沢 恵●中町

最近、イクメンやカジメンという言葉をよく耳にします。休日は子どもと遊び、食事を作り、趣味も少し、仕事とのバランスは保っている！と感じている方もいるでしょう。ただ、平日はどうでしょう。家庭ごとに役割分担は違うと思いますが、もう少し育児や家事に関わってくれたら…。そんな男性の理想と女性の現実がある気もします。働き盛りの男性は仕事も大変な時期、社会全体でバランスが取れるよう考えていければよいと思います。

家族への影響

富田陽子●境南町

半年ほど前から、夫は働き方を工夫し、平日にも子どもたちと共有できる時間を少しでも取るようにしている。結果、子どもたちは明らかに以前より父親をより身近に感じている様子で、ことあるごとに「おとうさんは今どこ？」と存在を確認する。そして妻である私自身が、平日を夫とシェアできることに予想外に安心している。一人の男性のワーク・ライフ・バランス、周囲への影響は本人の想像以上に大きいのではないだろうか？

時間の使い方改革と男性の生き方改革

逸見彰彦（へんみ）●吉祥寺東町

日常の時間の中で、満員電車の通勤時間が最も無駄な時間だ。この時間を仕事・家庭・コミュニティ活動の、仕事以外の時間に割り当てられたら生活の幅が豊かに広がる。思い切って早起きして電車で座って通勤、その間に仕事のための自己研鑽を済ませ、早朝から勤務、早く仕事を切り上げて家庭の役割を果たす。その習慣が積み重なれば人生が、家庭が変わる。働き盛りだからできる自己改革が今の男性の務めではないだろうか。

BOOKS 男女平等推進センターの蔵書から 貸し出しています！

家族幻想 ―「ひきこもり」から問う

杉山 春　（ちくま新書）

子育てや介護、「家族」だけではすべてを背負いきれない時代を迎えている。しかし依然として、社会の根底に残る「家族である以上はこうあるべき」という“家族幻想”。著者が問いかける現代家族への大きな疑問符には圧倒的な説得力があり、社会に開かれた家族のあり方や可能性についても考えさせられる一冊。

男尊女子

酒井順子　（集英社）

日本の男女平等はなぜ進まないのか。そして男女平等は本当に幸せなのだろうか。女性たちは時と場合に応じて平等の中心線を変えている。そんな女性たちの心の中にある“小さな女子マネ”の精神に着目し、女性の中にある男女差別意識をあぶりだしていく新しい視点の男女平等論。

ルポ 父親たちの葛藤 ―仕事と家庭の両立は夢なのか

おおた としまさ　（PHPビジネス新書）

父親の家事・育児に関する状況はこの10年、あまり変わっていない。データだけでなく多くの生の声を集めることで、今一度、男性の家事・育児に関する現実を客観的にとらえなおしていく。男性たちが板挟みの状況をうまく切り抜け、少しずつ社会を変えていくためのヒントを提案してくれる貴重な一冊。

まなこ DEC. 2017 101
生き方・いろいろ・ゆたかな人生～男女平等推進fromむさしの『まなこ』第101号
企画・発行：武蔵野市市民部　市民活動推進課　男女平等推進センター　2017年12月発行　〒180-0022 東京都武蔵野市境2-3-7　TEL：0422-37-3410（ダイヤル・イン）

『まなこ』は文字通り「眼（まなこ）」。人やまちや文化や地球を、男女平等の視点＝「まなこ」で見ていこう！という思いで名付けられました。
1991年創刊以来、市民が企画・編集にかかわっています。

INFORMATION
男女平等推進センター ヒューマンあい から

◉『まなこ』100号記念パネル展示・ミニトピックス展示

7月に『まなこ』が100号を迎えたことを記念して、パネル展示とミニトピックス展示（関連図書展示）を行いました。

◇**パネル展示**　7月24日（月）～31日（月）市役所ロビー
◇**ミニトピックス展示**
7月24日（月）～8月7日（月）　中央図書館
・貸出本の冊数：33冊（総貸出数：43回）
・1開館日あたりの貸出冊数：3.3冊

◉武蔵野市男女平等に関する意識調査

平成29年10月、満18歳以上の市民の皆様から1,500人（男女750人）の方を無作為抽出し、意識調査を実施しました。市民の皆様のご意見・ご要望を反映させていくため、調査結果をもとに第四次男女平等推進計画を策定します。

◇**回収結果**　有効回収数534人（女性270人、男性240人、その他2人、性別無回答22人）有効回収率35.6％
◇報告書は1月発行予定で、ヒューマンあい・市政資料コーナー・図書館・ホームページ等で閲覧ができます。

◉女性に対する暴力をなくす運動

毎年11月12日～25日（25日は女性に対する暴力撤廃国際日）を、女性に対する暴力をなくす運動期間としています。本来、暴力は性別や加害者・被害者の間柄を問わず、決して許されるものではありませんが、配偶者などからの暴力、性犯罪、セクハラ、ストーカー行為、売買春などの暴力が女性の人権を著しく侵害している現状があります。この運動を通して、暴力や人権尊重について一緒に考えていただくため、関係団体との連携・協力の下、関連講座やデートDV防止パネル展、関連図書展示等を実施しました。

パープルリボンを手にする
松下市長と本間市議会議長

◇**関連講座**
・脱DVの法律知識～別居・離婚・子どものこと（講師：露木肇子さん）11月19日(日)午後1時～3時　男女平等推進センター会議室
・日本の憲法・家族法に見る女性とその地位（講師：清末愛砂さん）11月25日（土）午後3時～5時　男女平等推進センター会議室
◇**パネル展「それってラブラブ？」～デートDVを考える**
11月7日（火）～12日（日）市民会館ロビー
11月13日（月）～19日（日）武蔵野プレイスギャラリー
11月20日（月）～24日（金）市役所ロビー
11月27日（月）～12月4日（月）　コピス吉祥寺　A館4階
（協力：尼崎市女性センター・トレビエ、こうち男女共同参画センター「ソーレ」）
◇**関連図書展示**
11月1日（水）～26日（日）中央図書館
11月13日（月）～19日（日）武蔵野プレイスギャラリー

相談窓口のご案内　相談無料　秘密厳守

◆女性総合相談

女性が暮らしの中で抱えるさまざまな悩みについて、女性の専門相談員がお話を伺い、解決に向けて一緒に考えます。夫やパートナーとのこと、家族のこと、職場や学校でのことなど、どんな些細なことでもかまいません。誰かに話すことで、気持ちが楽になることもあります。お気軽にご相談ください。

【相談方法】面接・電話による相談（どちらも予約制）、当日申込可
【相談場所】センター相談室
【申込み方法】センター窓口または電話にて予約を受け付けます。

相談時間（1回50分）

第1土曜日	①午後1時～	②午後2時～	③午後3時～
第2金曜日	①午前9時～	②午前10時～	③午前11時～
第3月曜日	①午後7時～	②午後8時～	
第4火曜日	①午後1時～	②午後2時～	③午後3時～

◆DVなどの相談はこちらでも受け付けます

◆武蔵野市
ひとり親・女性相談　0422-60-1850
（祝日・年末年始を除く月～金曜　9:00～17:00）
◆配偶者暴力相談支援センター
東京ウィメンズプラザ　03-5467-2455
（年末年始を除く毎日　9:00～21:00）
東京ウィメンズプラザ（男性のための悩み相談）03-3400-5313
（祝日・年末年始を除く月・水曜　17:00～20:00）
東京都女性相談センター　03-5261-3110
（祝日・年末年始を除く月～金曜　9:00～20:00）
東京都女性相談センター多摩支所　042-522-4232
（祝日・年末年始を除く月～金曜　9:00～16:00）
◆警察
警視庁総合相談センター　03-3501-0110
（祝日・年末年始を除く月～金曜　8:30～17:15）
◆夜間・緊急の場合
警察　110番（事件発生時）
東京都女性相談センター　03-5261-3911（夜間・休日のみ）

武蔵野市立男女平等推進センター ヒューマンあい ご利用案内

〒180-0022　武蔵野市境2-3-7　市民会館1階　　開館時間：午前9時～午後10時（木曜・年末年始 休館）
電話：0422-37-3410　　FAX：0422-38-6239　　Eメール：danjo@city.musashino.lg.jp

＊STAFF＊

サポーター　久世 めぐみ　富沢 恵　富田 陽子　久富 明美　福島 佐知子　逸見 彰彦　若林 優香
企画・取材・編集　大久保 力　神谷 奈央子　小西 美穂子　島崎 理恵　藤田 和香子　矢後 麻美　男女平等推進センター職員
編集協力　栗原 毅
表紙デザイン　ふじわらりわ
レイアウト　上田ジュンコ
印　　刷　プリンティングイン株式会社

『まなこ』は市役所、市政センター、図書館、コミュニティセンター、駅、医療機関、理美容院、大型店舗、金融機関、おふろやさんなど市内の約490か所に置いてあります。バックナンバーをご希望の方は、男女平等推進センター ヒューマンあいまで。

＊配布は、公益社団法人武蔵野市シルバー人材センターのご協力を頂いております

Editors' Notes 編集＊後記

瀬地山先生を訪問したとき、ロビーで待つ我々の前をリュック背負って颯爽と通り過ぎたエネルギッシュな姿。研究室では、冷えたお茶をさっと振る舞う手際の良さにびっくり。（大久保 力）

人間関係が希薄になりがちな現代で、積極的に人とつながろう、人と地域をつなげようと頑張る人たちもいる。つながることで自分に新しい何かを発見する楽しさを私も多く感じたい。（神谷奈央子）

働き方を変えるといっても一筋縄ではいかないのが現実。社会のため、子どものため、という大義だけでなく、皆さん、楽しさ、自分らしくいられる心地よさを感じていることが印象的でした。（小西美穂子）

街中で見かける広告デザインを手がける阿部さん。ウェブ上で仕事や物事のやり取りをすましがちな現代を心配し、直接人とふれあえる活動を他者にも勧める姿に好感がもてました。（島崎理恵）

デンマークの教育現場で働く日本女性の話を聞く機会があった。労働時間が短く、男女とも子育てと仕事を両立しやすい。学校に関心を持つ親が多く、PTA役員は選挙で選ばれると聞いて驚く。（藤田和香子）

「WLBを実現するためには、もっと個人が闘うべき」「制度はあっても、風土がない」「偏見は時には暴力になる」――今号の取材を通して印象に残った言葉です。（矢後麻美）

◎綴じ込み返信はがきで、ご意見やご感想をお寄せください。次号は平成30年3月発行予定です。